ミニシアターまる「金のたい」

欲をかくと碌なことがないというのは昔話の定番で、子供のころからそういった類の話を繰り返し見聞きし、無欲は美徳という風に深く考えることもなく思っていました。そんなぼんやりとした価値観をもって今まで来たので、私もやはり自分を無欲な人間だと思って、欲どしい世俗を達観するような心持ちでさえいましたが、もし「金のたい」に何でも聞いてもらえるとなったらどうかと考えると、次から次にお願いしたいことが出てきそうです。無欲でありのままを受け入れつつ生きてきたつもりでしたが、もしかすると無欲は美徳といくことを自分がなまけるための口実にしていたのかもしれません。この「金のたい」のお話でも、おばあさんは良い着物と大きな家が欲しければ、それに向かってせっせと努力していたなら、とても良いおばあさんであったことだろうと考えると、適度な欲と、それを満たすための努力は人には必要なことだなというようなことを考えました。
数年前にミニシアターまるの作品を見たときにも感じたことですが、そのシンプルさに好感を持ちました。舞台表現では、進行する物語とは別にそこに演じる人間がいて、観客がそれを感じ、知るということもあってほしいと私は思っていて、それがミニシアターまるの舞台では感じられるのは、その飾らなさからだろうと思います。
ぜひ今後も活動を続けていただき、後進を育てていただきたいと思います。

藤原大介（劇団飛び道具）